

<展望>風俗の変容

笠原, 淳 / カサハラ, ジュン

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

60

(開始ページ / Start Page)

126

(終了ページ / End Page)

127

(発行年 / Year)

1999-07-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020081>

風俗の変容

笠原 淳

近頃、小説の読者が少なくなっていると言われる。学生たちの傾向を見てもうなずける。(文学部の文芸創作コースに入ってくる連中においてもだ！)

ただ、小説に対する関心が薄れているのかというと、さにあらず、本はあまり読まないが、書きたいという人々は一向に減っていない。全国の同人雑誌の発行点数もおびただしいものであるし、各地の小説教室もおおむね盛況と言っている。

小説はとりあえず字さえ知っていれば誰でも書けるものである。いや、字を知らなくても、口述という手もあるから、自己表現の手だてとしてはまこととつかかり易いし、極端な話、他の芸術(音楽、絵画など)にくらべて然るべき習練も必要としないから、書きたいと思う気持さえあれば誰でも小説作品を生むことが出来るわけだ。

だが、昨今の俳句ブームをひきあいに出すまでもなく、書けばそれでもいいというわけにはいかない。ゲーテの批評の三原則にもあるように、書くほどの値打ちがあつたか、となると、小説の書き手の繁盛を同慶のいたりとはしゃいでもいられない。誰でも書けるが、誰もが書けるわけのものではないという、とつつき易いが厄介なのが小説でもあるのだ。

たとえば、同人雑誌に発表される作品を読む機会が時折あるが、かなり高いレベルに達しているものが多い。一応安心して読める。いかにも小説らしい作品である。(ぼくが本当に読みたいのは、実は小説らしくない小説なのだ)ともかく、点数をつけるとすれば合格点とする他はなかるうというものが多い。つまり、総じてみな巧いのだ。

それで何の文句があるか。巧く書いていけばそれでもいいではないか。世態人情の実がたしかにとらえられていけば十二分ではないか。

にもかかわらず、巧い小説を通読して、ぼくは何だかゲツソリさせられるのだ。つまり、巧いなと思う小説作品は総じて自然主義リアリズムがしっかり身についた作法で描かれており、それゆえ安心して読めるのだが、その安定し

た作法にあぐらをかいているという風に思われるためらしい。

自然主義リアリズムを難じているわけではない。それに安住していることを、否、と言っているのだ。

いささか短絡的になるが、世界を自分の中にとり込むために、従来のリアリズム手法で間に合うのだろうか、と無茶なことを口走りたくなる。つまり、世界をキャッチするアンテナをそのままにしておいていいのだろうか、と。

従来、風俗がすっかり描ければ一人前だと言われてきた。ただの風俗小説だ、という評言はおとしめられた謂でもあったが、風俗が描ければ一人前、というのは今でもそれなりに正しいと思う。ただ、その肝心の風俗がどうもとらえ辛い時代になった。風俗というのは、世界をとらえる大きなよりどころの一つでもあったのだが、その風俗が実を失い、いわば虚構化してきたというのが現代の在りようなのではないか。

実は、この稿を書くにあたって編集子から、昨今の芥川賞作品の文体について何か感想があったらと言われて、さて、と首をひねり始めたのだが、たしかに芥川賞作品は現代文学の潮流の一面を映すサンプルとしては適当なテキストと言えるかもしれない。ほくはあまり熱心な読者ではないが、それでも「第三の新人」や、そのあとにつづいた「内向の世代」の諸作品とくらべると、たしかに変容しつつあるという感想をもつ。良し悪しではない。前述したように、自分をとりにまく世界(風俗)が変容するにつれて、そのとらえ方、描き方も当然異ってくる。

相変らず、現象としては暴力、セックス描写が盛んだが、これは風俗のとらえ方の一つの便法に過ぎないだろう。芸がないと言えばそれまでだが、風俗が虚構化するにつれて、作者の描き出す虚構にも自信をもち得なくなってくる。或いは、近代がたしかにとらえた「我」というものも拡散して、自分をとりにまく世界が一点に収斂してこなくなっているのではないか。それを自分「我」の中にとり込んで世界をとらえたりする認識には自信がもてなくなっているのではないか。

しかし、現代の新鋭作家それぞれに誠実に自分の文芸に関ろうとしていると思う。息づかい(文体)にとまどいはあるにしても、何かを模索している姿勢は真摯なものである。少なくとも、あぐらをかいているよりははるかに望ましい。新しいものを生む母胎は混沌なのである。

(かさはら じゅん・文学部教授)